

「ジェラルルの慈しんだ『日本』」

◎ 一私人の「生活史」

前稿で触れた通り、ジェラルルの生涯には未だ解き明かされぬ謎が多い。ランスのパン屋の息子が何故幕末混乱期の日本での起業を夢みたのか、日本での事業拡大に邁進しつつどのような生活を営み、何を考えていたのか、そして何故日本を去ったのか。それが謎として残るのは、水屋敷という上水施設と明治初期の各地に及び西洋建築に使用された煉瓦・西洋瓦を遺し、歴史の表舞台に登場することもなく忽然と姿を消してしまった、ひとりのフランス人実業家の「生活史」の解説に他ならないからである。

永代借地権の調査により発見された死亡記録とこれに続く現地調査から、農業指導にあたったランスにおけるジェラルルの後半生は詳かとなったものの、在日15年間の足跡は空白のまま残っている。

◎ 飛鳥田一雄の歴史的想像力

このひとりのコスモポリタンの人物像をおぼろげながらも最初に結実させたのは元横浜市長の飛鳥田一雄の歴史エッセイ「素人談義・三人ジェラルル」(1974)であった。飛鳥田は元町公園から発掘された大量のフランス瓦に刻まれたジェラルルの銘に関心を抱きJapan Directory (在日外国人名簿) や新聞広告等に登場する複数のジェラルル名の中から肉屋のジェラルル、水売りのジェラルル、煉瓦・瓦製造のジェラルルが同一人物であるとし、例えば横須賀製鉄所のジェラルルは「お雇い外人」という天皇にも接見可能な地位から考えて別人であり、またジェラルルが妻子を持たず帰仏後孤独な最期を迎えたのであろう、とその後の研究で明らかとなるジェラルル像を、殆ど手懸りのない中で先取る卓抜な歴史的想像力を発揮している。

◎ 一枚の肖像写真と謎のメッセージ

ジェラルルの人物像に触れる最も重要な素材は、ジェラルルの肖像写真である。日本では平成4年(1992)の永代借地権買戻し記録の発見以降もジェラルルの肖像写真の存在が知られていなかった。しかし、平成12年(2000)偶然、ジェラルルの肖像写真は発見される。

ルイ・クレットマンは明治9年(1876)、明治政府の軍事顧問として招聘されたフランス陸軍大尉で、陸軍士官学校で教鞭をとったが、本務の傍ら趣味として日本各地の写真を遺した。展示会用に横浜開港資料館がマルセイユ在住の孫から借用した数多くの写真の中に偶然ジェラルルの肖像写真が発見された。クレットマンは明治11年(1878)5月に帰仏しているが、この肖像写真は使用された印画紙が横浜の写真館のものであることと裏面にジェラルルの署名があることから、ク



ジェラルル 41 歳の肖像写真
と裏面の自署

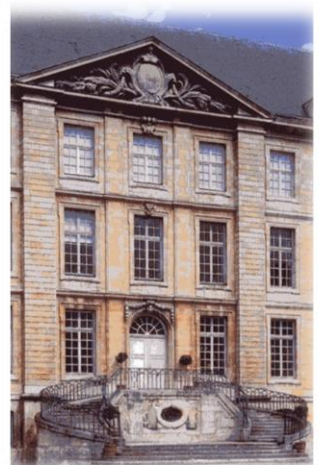
レットマンの帰仏にあたり、ジェラルルが自ら撮影し旧知の友に贈呈したものと考えられる。この肖像写真の「謎」についてはまた次稿以降触れることになるが、この署名には「ローニン(ノ)の国の記念に」と1878年5月14日の自署が付されている。時にジェラルル41歳。顎鬚を蓄えた精悍な実業家の面持ちである。一方で、クレットマンに宛てたメッセージは彼の生の声ではあるものの、その意味は不可解だ。

前稿で触れた通り、筆者は2007年12月にジェラルルの生没地ランスを訪ねたが、これも、このコスモポリタンの生活史発掘のヒントを探る旅だった。現在は一般公開されていないというジェラルル・コレクションを収蔵するランス市サン・レミ博物館を訪ねたのも、何とかその蒐集品を通じジェラルルの琴線に触れてみたい一心の故であった。

◎ ジェラルル・コレクションとの邂逅

その日、既にクリスマス休暇に入ったサン・レミ博物館は午後3時からという変則的な展示時間となっており、ランス近郊の小さな村ブザンヌにあるジェラルルの墓地を訪ねた筆者がその門を潜ったのは夕暮時だった。サン・レミ修道院は8世紀に設立され、現在の建物は火災により18世紀に再建されたものであるが、

広大で厳かな中庭を囲む回廊は、中世の修道院の面影を湛え、ユネスコの世界遺産にも指定されている。受付を済ませて入館すると、ふと受付脇の10㎡ばかりの小部屋の入口に日本美術の特別展の案内があり、もしや、と筆者の胸はときめいた。この小部屋で真っ先に



ランス市サン・レミ博物館

出迎えてくれたのはガラスケースに入った 20 cmほどの高さの陶器製の人形群であった。泥鰯掬い、洗濯女、果物売り、漬物女、蓮根を刻む女房、酒を飲む船頭など、その 9 体の人形は表情豊かに、江戸末期の庶民の生活を実に見事に活写している。解説文はフランス語



ジェラルール・コレクション

庶民のフィギュア

で読めないが最後にアルフレッド・ジェラルールのコレクションの一部であることが読みとれる。一瞬、背筋が寒くなるような感動を覚えた。ジェラルールの生身の感性との邂逅を感じたからである。

この小部屋にはジェラルールの蒐集品の一部数十点が展示されていた。それらは決して骨董売買を目的とした投機的なものではなく、例えば、雛人形や節句人形に付随したと思われる駕籠や漆器のミニチュア、祭りの様子を描いた象牙人形群、能面など寧ろ日本文化への民俗学的な関心に裏付けられた蒐集品であることが分る。もう一つの蒐集領域は、ジェラルール自身がパリ工業博覧会に自らの瓦・煉瓦を出展して工芸陶器部門で大賞を獲得したように、陶器への関心が強いことだ。2mほどもある巨大な陶器製の灯籠や大皿、日本陶製の洋食器などが目につく。そして最後の蒐集領域は、鎧兜、鞍、鐙、刀剣、槍などの武具である。



ジェラルール・コレクション
陶器の灯籠

◎ 蒐集品の数奇な運命

ジェラルールは帰仏後の 1891 年(明治 24) 5 月 1 日、54 歳の時にコレクションの内 800 点をランス市に寄贈する。実は、旧友コンスタンティン・レクレールの住民台帳に同居人として記載されるこの年まで、帰仏後のジェラルールの足取りには不明な点が多い。日本のジェラルール研究者の多くが 1890 年(明治 23)前後の帰国説を唱えていたことも故なきことではない。そして前稿記載のようにポメリー夫人の陶器コレクションと並び、1891 年(明治 24) 11 月よりジェラルール・コレクションは、ランス市博物館(当時は公民館に併設)の常

設で市民に公開される。そして、ジェラルールは 1897 年(明治 30)に追加の寄贈を行い品目は 2,456 点に及んだ。

しかし、その後ジェラルール・コレクションは戦争にその運命を翻弄されることになる。1913 年(大正 2)、ジェラルールの死の 2 年前、ランス市博物館は二代目のサン・デミ修道院に移設され、ここで常設展示の準備が行われていたが、この最中に第一次大戦の災禍に見舞われ、ジェラルール・コレクションも被災する。筆者が目にしたコレクションの一部にも特に陶器を中心に損傷・補修の跡が残り、戦争の爪痕を深く感じた。

その後、1978 年(昭和 53) 11 月、ランス市博物館は現在のサン・レミ修道院に移設されるが、ジェラルール・コレクションは常設展示されることはなかった。サン・レミ博物館の開館に際して「中世イスラムの武器展」が開催され、ここにコレクションの一部の武具が展示されたに過ぎない。ジェラルールが名付け親になった縁戚のジェラルール・カデル氏はこの時 90 歳であったが、ジェラルールの遺したコレクションが蒐集の意図を逸脱し部分的に展示されることを悼み嘆いていたという。

◎ 「ローニンの国」のジェラルール

ところで、一体何故、ジェラルールは多くの武具を集めたのだろうか。帰仏するクレットマンに宛てたメッセージ「ローニンの国の記念に」にその謎を解く鍵がありそうだ。

日本人の私たちが「浪人」と聞くと文字通り広義に捉えるのでその意図を量りがたい。しかし、丁度クレットマンが帰国する 3 年前の横濱を舞台に、フランス海軍士官が骨董屋の日本人娘と恋に落ちるノンフィクション「おはなさんの恋—横浜弁天通り 1875 年」(M. デュバール著)を読んでいてある事に気付いた。士官達が泉岳寺に遊びに訪ねる下りで、当時の一般的なフランス人にとって「ローニン」とは限定的に赤穂浪士のことを指し、彼らの行動に代表される「忠義に徹した武士道を体現する者」と理解されていた、ということだ。クレットマンへの一文に込めたジェラルールの思いがこの武士道気質であったと考えれば、彼が好んで武具を蒐集した心理的な風景も見えてくる。

筆者はここに文化人類学において相対主義的地平を拓いたフランス人らしい発想を垣間見る思いがする。われわれ現代人の力でいつしかジェラルール・コレクションの常設展示を実現し、メトロポリタン=アルフレッド・ジェラルールの地平に改めて立つことは、遠い夢なのだろうか。

[参考資料]

横浜開港資料館会報「開港のひろば」第 67 号(2000 年 2 月)
"Alfréd Gerard-le champenios de Yokohama" (Huguette Guyard/Presse Mumerique)